

福岡親子の会

つばさ

H24. 4. 22 発行

No. 22



昨年12月の定例会で、九大病院 子どものこころ診療部の吉田 敬子先生のお話をうかがいました。その中で私の心が動いたのは、「I AM」「I CAN」「I HAVE」という3つの言葉です。その頃少し精神的に疲れていた私をポジティブ指向へ導いてくれたキーワードです。私は目標があり、自由に使える時間があり、私を必要としてくれる仲間がいる。「ないないづくし」から「あるあるたっぷり」へと意識改革をすることができました。この3つのキーワードを私は周りの人へも伝えていきます。

素敵な講演を企画して下さいました先生方に感謝もうし上げるとともに、当日お世話下さいました皆様にこの場をおかりしてお礼を申し上げます。

つばさスタッフ 上野 朗子

先輩お母さんからのメッセージ

1988年5月九州大学病院歯学部を受診してから24年を迎えました。口唇口蓋裂の子どもを抱いて行った不安とかすかな希望のあの日のことをよく覚えています。

当時の九大病院は薄暗く曲がりくねった廊下、狭い診察室で本当に気がめいる場所でした。しかし先生方は優しく接して下さいました。エピソードをご紹介します。

子どもが2歳になり口蓋の手術を受けることになった時のことです。手術前に主治医のG先生が廊下のソファに子どもと並んで座られ「理子ちゃん、牛乳やプリンを食べた時にお鼻からでてくるよね。そしてハクションとかして嫌だよね。だから上手にゴクンができるようにお口の中を治そうと思うけどいいかな?」「いいよ!」「寝んねしてて起きた時に、お口が変な感じがするかもしれないけれど大丈夫だからね!」「はい」2歳児を相手に今でいう「IC(インフォームド コンセント)」をなされたのです。その後2度の骨移植、顎の手術(これは大手術でした)を受け、そして現在は矯正科とインプラント科を受診しています。矯正科の鈴木先生、安永先生には将来を見据えての相談にのって頂いています。

24年前に子どもが誕生した時に親友から言われました。「神様があなただからこそ授けて下さった赤ちゃんよ」と、その言葉を胸に育児(育自)をしてきました。この子が成長するように私も成長しなくてはとの思いです。10年前からSP(模擬患者)活動を大学や医療機関で行っています。この原点はG先生のICです。今年も九大の学生さんと会うのが楽しみです。九大病院でお世話下さいました多くの先生方、看護師さん、そして患者さん、保護者のみなさんありがとうございます。

子どもの誕生で少し驚かれた保護者のみなさん、私もこの病気だから辛いと思うこともありました。でも、今は幸せです。心からこの子が私のもとに生まれてきてくれたことに感謝しています。

上野 朗子

(注)

上野さんは“つばさ”の発足時から中心に動いて下さったお一人です。今回でスタッフを卒業されるにあたり思いをよせてくださいました。

家族スタッフも新旧交代時期になりました。子どもが小さい世代の方、是非スタッフの仲間に入って親子で成長していきませんか?

レクリエーションのお誘い

毎年屋外でのピクニックを企画していますが、毎回お天気が気になるため、体育館でできれば…と思っていたところ、今回運よく会場が確保できました！！
先生や看護師の方、他の家族の方と交流をし、楽しい時間を一緒に過ごしませんか？
(屋内なので、雨と日焼けの心配もありません！ 是非ご参加ください。)

日時 6月10日(日) 10時から 約2時間
場所 九大体育館(病院地区)
会費 1世帯 500円 (保険料含む)
集合場所 九大病院立体駐車場(病院玄関でもよい)
9時45分ごろからご案内



<参加確認>

参加できる方は、5月31日までにメールまたははがきにてお知らせください。

記載事項 *参加人数(大人的人数・子ども的人数と年齢) *お名前

連絡先

メール: tsubasa9@dent.kyushu-u.ac.jp

はがき: 〒812-8582 福岡市東区馬出3丁目1-1

九州大学病院 顎顔面口腔外科

言語治療室 山田 逸朗

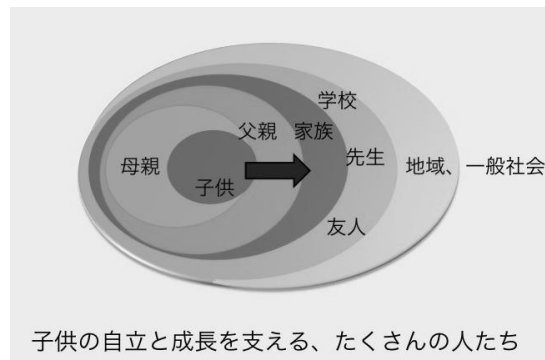


平成11年度 「つばさの会」講演会



(抄録 吉住先生)

今年のつばさの会講演会は、子どものこころの発達と対応について「治療が必要な子どもたちのために」と題して、九州大学病院 子どものこころの診療部 教授 吉田敬子先生にお話しいただきました。多くの方々にご参加いただき、みんなで子どもたちの心の問題を考える貴重な機会になりました。子どもたちはその年齢に応じて、体も心も成長しています。親として、またご家族を見守る医療者として、子どもたちにその時どんな風に関わりを持ち、何を伝えれば良いのか、みなさんそれぞれお考えになった事と思います。



年齢に応じたこころの育ちのためには、幼少期に養育者との間に培われる基本的信頼感・安心感が地盤になり、母親との関係は、成人後の人間関係の基本になります。学童期になると自我が目覚め、家族、地域、一般社会と多くの人々に支えられて子どもたちは自立していきます。そしてどんな子どもたちにも困難はやってきます。特に「治療が必要な」子どもたちは傷つく事も多いかもしれません。わたしたちはどのように支えていけば良いのでしょうか

子どもたちが楽しく学校や社会生活を送るため、そして困難を乗り越えていくための手段として『レジリエンス』という考え方を学びました。『レジリエンス』とは

■「ばね」「弾力性」「回復力」

■ストレスフルな状況で、傷つくことが避けられないからこそそれを乗り越えていくために機能する性質

といわれています。『レジリエンス』は気質、自尊心、共感性といった子どもたちの性格的なもの、幼少期から培われたコミュニケーションやソーシャルスキルなどの能力、そして子どもたちを取り巻く家族や親、学校や医療者などのサポートできる環境による相互作用により形成されます。すべては子どもたちの財産となり、生きる力になります。



子どもたちはこれから、ものごとがうまくいかなかったり、失敗したりすることもあるでしょう。しかし過去は変えることはできないのですから、経験をふまえて次の一歩を踏み出せるように、心の育ちを支えていきましょう。

吉田先生が診療を行っておられる「九州大学病院 子どものこころの診療部」では発達障害をもつ子どもの総合的な診断評価と関連機関との連携、養育者のメンタルヘルスも含めた家族支援、周産期の女性のこころの健康と育児支援、乳幼児期のこころの問題など、子どもたちをとりまく様々な問題を幅広く支援していただけます。受診の御希望があればご相談ください。

皆様の講演会に対するコメントの一部をご紹介します。

- ・ 私のうちでは、生まれた時から、本人に病気の話や写真をみせてきました。本人も理解しているようではあります。ただ、今回の講演を聞いて、もう一度本人にじっくりと病気の話をしてみようと思いました。
- ・ もっと子供のサインをキャッチして、返していけるように努力しようと思いました。
- ・ 心の診療部吉田先生の貴重なお話が聞けて、とても光栄でした。友達の悩みの糸口になる話があり、早速話してみようと思います。
- ・ とても興味深い話で、子育ての参考となりました。

次回の講演会に対する御希望がありましたらご連絡ください。今後も時期や時間帯など配慮していきたいと思っております。あわせて御希望がありましたら受診の際にお知らせください。